

P-271 妊娠中における可溶性インターロイキン6レセプターに関する研究

大阪大、愛染橋病院*

山口正明、坂田正博、前田哲雄*、小倉一宏、池上博雅、廣田憲二、三宅 侃

＜目的＞ヒトおよびマウスの血中可溶性インターロイキン6レセプター(sIL-6R)濃度の変動についての報告は少なく、また血中 sIL-6R の産生部位については明らかではない。そこで本研究では、主に妊娠中の人およびマウス血中の sIL-6R 濃度の推移、sIL-6R の産生部位の検索、および sIL-6R 産生の調節機序の解明を目的とした。

＜方法＞(1)ヒトおよびマウス sIL-6R の RIA を確立し、その血中濃度を測定した。(2)マウス胎盤および脱落膜より RNA を抽出し IL-6R mRNA 発現の有無について Northern blot 法にて検討した。(3)マウス脱落膜細胞初代培養系を用い、sIL-6R 分泌調節因子を検索した。＜成績＞(1)ヒトでの血中 sIL-6R 濃度は妊娠の進行とともに上昇するが、月経周期および加齢による変動はみられなかった。またマウスでも、妊娠中の血中 sIL-6R 濃度は初期の 41.2 ng/ml から後期の 149.1 ng/ml に上昇がみられた。(2)マウス脱落膜に多量の IL-6R mRNA の発現がみられ、また脱落膜細胞培養上清中に sIL-6R の分泌がみられる事を確認した。(3)マウス脱落膜細胞からの sIL-6R 分泌量は、 2.5 nM の IL-6 および 0.5 mM の cAMP により 約50% 減少した。＜結論＞ sIL-6R は妊娠中に脱落膜から産生され、それにより血中 sIL-6R 濃度が増加し、IL-6 や cAMP によりその分泌が調節されていることを明らかにした。

P-272 正常初期妊娠絨毛及び脱落膜組織における細胞周期調節因子の発現についての検討

信州大

市川直子、李 栓芳、土岐利彦、二階堂敏雄、藤井信吾

【目的】絨毛細胞は正常細胞でありながら腫瘍細胞のような増殖能や浸潤能を有する。従って、絨毛細胞の子宮内膜浸潤部位における増殖能の制御機構を知ることは、癌の浸潤機序の解明の一助となるはずである。そこで正常初期妊娠絨毛の子宮内膜浸潤部位において、細胞周期調節因子群の発現を検討し、その増殖能の制御機構を解析した。

【方法】同意のもとに人工妊娠中絶術によって得られた、妊娠6～12週の正常絨毛組織及び脱落膜材料を用いた。ホルマリン固定、パラフィン包埋切片に対して細胞周期調節因子群：サイクリンA、B1、E、サイクリン依存性キナーゼcdk2、増殖指標Ki-67と絨毛細胞を分類する：hCG、hPL、サイトケラチンの免疫染色をSABC法にて行った。

【成績】絨毛を形成するcytotrophoblast(CT)には、Ki-67陽性細胞が多く、これに呼応した形でサイクリンA、B1、E、cdk2の発現がみられた。また子宮内膜浸潤拠点であるanchoring villiのCTは、ほぼ全細胞にサイクリンA、B1、Eを発現しKi-67もこれに呼応していた。ところが、脱落膜に浸潤したintermediate trophoblast(hPL陽性細胞)は、サイクリンAとKi-67がほぼ全細胞で陰性となったがサイクリンEとB1は陽性であった。脱落膜細胞ではサイクリンEの細胞質染色が特徴的であった【結論】絨毛細胞(CT)は内膜に接する部位で最も増殖能が高く、内膜に浸潤するとサイクリンEとB1を発現しているにも拘わらず細胞増殖停止状態となり、hPL産生細胞へと分化する機序が存在するものと考えられた。この浸潤部位の絨毛細胞の増殖制御機構には癌細胞とは本質的に差異があるものと思われた。また脱落膜細胞とのinteractionが細胞増殖停止状態に関与する可能性が推察された。